

心の托鉢

第三話・愛語施雑想

早坂浩八

広辞苑によれば、コミュニケーションとは「①社会生活を営む人間の間に行われる知覚・感情、思考の伝達一言語、文学その他視覚聴覚に訴える各種のものを媒介とする。②動物相互間での身振りや音声などによる心的内容の伝達」…とあります。

私達の生活は、「おはよう」から始まって「さようなら」までの一日のあいだに、数多くの応接があり、主に言葉を軸にしてさまざまな人間関係が存在しております。

人間関係において、コミュニケーションの要諦は一人はTPO（つまり時、場所、事情）が異なる場合、考え方や態度したがってその役割（立場）も異なることに留意し、その時、場所、場合における相手なり事実をありのままに受けとめ対応していくことである、と言われております。

コミュニケーションがうまくいかない理由は、「自分の関心、自分の立場」だけから話をするので、残念ながら日常の周辺でたまたま経験することあります。

たしかに、相手方が特に関心をもっていないとすれば、こちらの話は聞いてもらえない訳で、理解されずに終わってしまう筈で

す。

相手によっては、当方の誤り（と専ら認識している事象）を指摘し、正しい（と思っている）意見を述べることに熱心になる結果、双方の意思が通ぜず、コミュニケーションがスムーズに行かなくなるのは、極めて当然のことでありましょう。

そこで、自己を主張する前に、自己のために、自己の成長のために、静かに「聞く（聴く）」という姿勢を意識的に身につけていくことが肝要であると考えます。

「話し上手は聞き上手」と言いますが、これにも新しい時代に即応した解釈と実践が必要になって来ているように思われます。

「他人の話に耳を傾ける」ということは、決して受け身、消極的というイメージな行動ではないのであって、むしろ積極的、能動的な行動であり、相当の努力と忍耐を要する困難な仕事といえるのではないのでしょうか。

国際基督教大学の斎藤教授(言語学)は、「コミュニケーションの場における<聴く>ということとは、相手の話に集中し、自分を

「無」にして相手の意見、反応、結論、判断、感想などを一応受け入れる…つまり自分の人格で相手の人格に接することなのです」と述べたあと、「水が一杯入っているコップはそれ以上の水を受け入れませんが、空っぽのコップはいつでも水を注ぎ入れることが出来るのです」と語っておられますが、私は深い共鳴を覚えるのです。

言語には、(1)読む、(2)書く、(3)話す、(4)きく(聴く)、それに(5)考える、という作用上の五つの分野がありますが、そのいずれもが習得する性質のものであります。

したがって、「きく」ということでも生まれたときからひとりでは出来るものではありません。

私達の場合には、会話のあり方として、話し方からではなくてはなし(他人の話)を最後まできくということから出発する必要があるように思えるのです。そして相手の意思、立場、関係枠組など相手の周辺事情を理解した上での会話に入るべきなのであります。

会話は、よくキャッチボールにたとえられます。

相手の投げるボールを確実に受けとめる、そして相手の取り易いナイスボールを投げることなのです。

会話は一方的ではなく、やはり投げたり、

受けたりということではなくてはいけないし、その内容において、「聴く」姿勢は受け身の姿勢ではなく、積極的な姿勢であって話し手に話したいという意欲をおこさせるものであることが理想であるように思います。

言葉を軸にして営まれる人間関係…言葉は心の窓であり、言葉づかいは心づかいと謂われる所以がここにあると思うのです。

第三話 おわり

(協会 事務局長)

